

【暗唱聖句】「神よ、わたしの内に清い心を創造し新しく確かな霊を授けてください」詩篇 51:12

【今週のポイント】

【日曜日・疲れ果てて】

ダビデはアンモン人との戦いのために全軍を送り出した後、エルサレムにとどまり、屋上を散歩していました。すると、水を浴びていたウリヤの妻バト・シェバに目に留まります。彼女は大変美しく、ダビデはすぐに彼女を自分のもとに呼び寄せると、床を共にしてしまいます。これがきっかけとなり、ダビデは泥沼にはまり込んでいきます。何と、バト・シェバは妊娠してしまうのです。絶対的な権力を持っている王であっても、これは明らかに神様の律法に反することでした。彼は、この問題を何とかうまくおさめようと色々と画策します。まず夫のウリヤを戦地から呼び戻し、妻のもとに帰らせようとします。妻と床を共にすることで、お腹の中の赤ちゃんをウリヤの子どもと思わせようとしたわけです。ところが、正義感の非常に強いウリヤは、主人ヨアブも仲間たちも、いま戦場で戦っているのに、自分だけが家に帰るわけにはいかないと、王宮の入口で眠るのです。ダビデの最初の計画はうまく行きませんでした。そこでプランBです。何と、ウリヤを激戦地に送り、しかもウリヤ一人だけをそこに残して撤収させよと命じたのです。これは明らかにウリヤを死なせろという命令です。自分の罪を隠すために、罪のない、しかも王に対して忠実な人を殺そうとさえするとは、なんと恐ろしいことでしょうか。罪を隠そうとするあまり、完全に正しい判断ができなくなっています。平安とは程遠い状態です。「休み」という観点から見れば、罪を隠そうとすると、心の中から「休み」が奪い取られていくのです。

【月曜日・目覚ましの電話】

ダビデはウリヤを死に至らせ、ウリヤの妻バト・シェバを自分の妻とする大罪を犯しましたが、それを知っているのは自分だけです。この問題は自分一人のうちにとどめておこうと考えたことでしょうか。ところが神様はすべてをご存知でした。預言者ナタンを送り、そのことを知らせます。ただ、ナタンは最初からストレートには語らず、例えを用いて語ります。それは金持ちと貧しい男のお話で、金持ちは客に自分のたくさんの羊や牛を惜しみ、貧しい男が持っていたただ1匹の小羊を取り上げてふるまったというたとえ話でした。それを聞いたダビデは、「そんなことをした男は死罪だ…そんな無慈悲なことをしたのだから」（サムエル下 12:5, 6）と言います。その瞬間でした、ナタンは「その無慈悲な男とはあなたのことだ」と、ずばっと指摘するのです。偉大なる王に対して、断罪するこのような言い方は、信頼を得ているナタンでも勇気のいる言葉だったことでしょうか。しかし、ダビデはナタンに、「わたしは主に罪を犯した」と言って素直に罪を認めるのです。やはりダビデは罪悪感に苦しんでいたのかもしれませんが。

また、興味深いことに、ダビデは「バト・シェバあるいはウリヤに対して罪を犯した」とは言わず、「主に対して罪を犯した」と言っています。すべての罪は神様へとさかのぼるのです。ダビデはバト・シェバあるいはウリヤに対してはもちろんのこと、神様を裏切った、神様を傷つけたことを後悔したのです。

【火曜日・赦され、忘れ去られる】

ダビデが自分の罪を認めると、驚くべきほど速やかに、「主があなたの罪を取り除かれる。あなたは死の罰を免れる」と告げられます。罪を心から悔い改めると、神様はすぐに赦してくださるということがわかります。しばらく様子を見ようとはなさいません。私たちも罪を悔い改めたなら、その罪は赦されたと信じなければなりません。そのとき平安が戻ってきます。

しかし、生まれてきた赤ちゃんは7日目に死んでしまいます。ダビデは助かるように断食して祈りますが、かないませんでした。これは罪は赦されても、その影響は残るということです。その実を刈り取らなければならないことがあるということです。ダビデの犯した罪が、全く罪のない赤ちゃんに及ぶというのは辛いことです。神様は、罪の結果生まれてきた赤ちゃんが、この地上で苦しむことのないようにされたのかもしれませんが。おそら

く、赤ちゃんを見るたびにウリヤのことが思い出され、それがダビデもバテ・シェバも、この子自身も苦しめることになったのかもしれませんが。ダビデは詩篇で次のように祈っています。

詩篇 51:3～7「神よ、わたしを憐れんでください。御慈しみをもって。深い御憐れみをもって背きの罪をぬぐってください。わたしの咎をことごとく洗い、罪から清めてください。あなたに背いたことをわたしは知っています。わたしの罪は常にわたしの前に置かれています。あなたに、あなたのみにもわたしは罪を犯し御目に悪事と見られることをしました。あなたの言われることは正しく、あなたの裁きに誤りはありません。わたしは咎のうちに産み落とされ、母がわたしを身ごもったときも、わたしは罪のうちにあったのです。」

罪の重荷に苦しみ、主の赦しと憐れみを祈っています。王だからといって何でもできるとは考えていません。主の御前に、この地上の王としての位など、何の役にも立ちません。むしろ、一人の罪深い人間として、罪を後悔し、主に赦されることを求めているのです。

### 【水曜日・新しいもの】

詩篇 51:9、10「ヒソプの枝でわたしの罪を払ってください。わたしが清くなるように。わたしを洗ってください。雪よりも白くなるように。喜び祝う声を聞かせてください。あなたによって砕かれたこの骨が喜び躍るように。」

ダビデは、祭司が清めの儀式で使うヒソプの枝で清くなるようにと罪を払い、洗って下さいと祈ります。そして、罪が赦されることで救いの喜びが湧き上がることを求めています。さらに、単に罪が赦され清められるだけでなく、同じ罪を犯すことのないように、「わたしの内に清い心を創造し、新しく確かな霊を授けてください」(51:12)と祈ります。人類が初めて罪を犯した時、アダムとエバは神様の顔を避けました。しかし、ダビデは大罪を犯しながら、むしろ逆に神様に近づこうとしています。神様なしに生きられないことを知っていたからです。罪は、神様から離れてしまうことで起こります。だから、罪深さを自覚しているものは、神様を求め、神様の近くに生きる他ないことを知っているのです。そして、そんな悔い改めた者を、神様は赦し、愛して下さることも知っています。

### 【木曜日・神の光を映す者たち】

第一ヨハネ 1:9「自分の罪を公に言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、罪を赦し、あらゆる不義からわたしたちを清めてくださいます」

この御言葉は、詩篇 51 篇を短くまとめています。罪を告白し、赦しを請うなら、神様が必ずその罪を赦し、あらゆる不義から清めてくださいます。赦されない罪はないし、清められない罪びとはいません。ダビデは神様に赦され、清められたことに対する喜びを、次のように表現しています。

詩篇 51:15「わたしはあなたの道を教えます。あなたに背いている者に罪人が御もとに立ち帰るように」

ダビデは自分自身の罪と赦しの経験を通して、同じように罪に陥っている者たちに、主に立ち返るように正しい道を教えると言っています。自分の苦い経験が人のためになることがあります。その赦しの経験が大きければ大きいほど、真実の証を語るができます。ダビデは赦された喜びを伝えたいと思ったのです。自分の愚かな罪でさえ、神様が用いられるのです。元やくざが刺青を見せて、自分の罪深い過去と赦された今を証していましたが、本来であれば隠しておきたい過去を隠さず、逆に赦されたことを証することで、神様の栄光を讃えているのです。ダビデは王としてのプライドも捨て、自分の罪・過ちを歌にしたことで、今日でもなお多くの人の慰めと救いになっています。